

ベート・ローガがヘスティアファミリアに入るのは間違っているだ
ろうか

爺さんの心得

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数々の大地に、ある大都市がある。そこには地下深くまで続く『ダンジョン』があった。何故そこにダンジョンが出来たのか、まだ明白なことは解明されていない。

そして、そのダンジョンの真上に建てられた巨大な摩天楼施設『バベル』を中心に、ある大都市が出来上がる。

迷宮都市『オラリオ』。その名が、かの大都市の名だった。

都市外からやってきた未来ある冒険者達、そして娯楽を求め下りてきた神々を送るこの物語は、一人の神とある狼人との邂逅により、ローラー歯車は動き出す。

これは、ちよつとツンデレな狼人と、ロリツ娘女神、そして純粹鈍感白兎が送る、ある眷属の物語の一ページである。

目次

白兎は弱者であり、凶狼は強者である

凶狼の眷属の物語	1
憧憬する白兎との邂逅	9
逃げた白兎と焦燥する凶狼	15
羨望する凶狼	27
凶狼と白兎の外食	33
書き換えられる英雄の軌跡	42
僕は今日、初めて初期位置に立つ	51
※リメイクするかもしれないお知らせ※	58

白兔は弱者であり、凶狼は強者である 凶狼の眷属の物語

「強く、なりてエ」

ウエアウルフある狼人は、雨の中唸る。

泥だらけの服を雨で重くしながらも、傷だらけの彼はギリツと歯を食いしばる。

誰も通らない、このストリート。雨のせいか、人通りも少なくなっている。ここを通るのは、一仕事終えた冒険者くらいだ。

「誰よりも、強く……ッ！」

狼人はまた、唸る。

もう、こんな惨めな醜態は晒したくない。あいつらの元へ帰りたくない。それが彼の中を占めている、邪の心であり、善の心であった。だから彼は、純粹に力を求める。

「俺は、俺を越えるんだ……ッ！」

だが、雨がそれを許さない。重くなった狼人の体は、思うように聞いてくれない。

これが、弱者の姿。狼人はそう誤認してしまい、また歯を食いしばる。

何故だ、何故自分はこんなにも弱い。

何故自分は、こんなにも、何も出来ない。

「ちくしょう……ッ！」

涙を流したら、本当の弱者と化してしまう。

それだけは嫌だった。それだけは、本当に拒んだ。

また、自分の足で、自分に見合ったファミリアを探さなくてはならない。

そうだ、あんなファミリア狙い下げだ。こっちは的確なことを言っ

たのに、それに激怒して集団で襲ってくるなど言語道断。

だが彼らは自分とは違い冒険者。恩恵を貰つていない彼と冒険者との差は歴然。なので彼は、こうやって惨めな醜態を晒している。

だから、彼は力を求めた。

誰にも負けない、強い力を。

「負けねエ……越えてやる……ッ！」

手について必死に起き上がろうとする彼に、ある影がかかった。

それに気づいた彼は、ゆっくりと顔を上げる。

顔を上げた先には、黒髪ツインテールの青色の瞳の少女が、青い傘をこちらに傾けていた。

彼女の行為によって狼人に降りかかる雫は途絶え、傘に当たる途端弾けていく。

「やあ、未来ある少年。こんな所で何をしているんだい？」

その少女の言葉は、酷く大人びていた。

一つ一つの言葉に威厳があり、今の彼では押し潰されそうになる。

だから彼は、確信することが出来た。

彼女は、神だ。

下界に娯楽を求めてやってきた、神だと、そう確信した。

少女はその豊かな双丘を揺らしながら、彼を見下ろす。ポタポタと水滴が彼の周りに落ちていき、まるで彼と彼女の空間を作っているかのようにだった。

狼人は神の言葉に、ポツリと零した。

「強く、なりてエ」

その声に強さを感じさせないものの、その信念の強さはビシビシと伝わってくる。

女神は狼人の言葉にキョトンとしたが、次第にクスクスと笑い始めた。

「そうか、強くなりたいのか。じゃあ何でここにいるんだい？そんな傷だらけで」

「……………俺が弱エから、こうなった」

「もしかして、リンチかい？全く、一般人をこんな風にするとは、何

処のファミリアだ？……いや、何処のファミリアって可能性も低い
か」

うーんと唸っていた女神だったが、その後考えることを止め、彼の
前に腰を下ろす。さらに彼女の顔を間近で拝めることが出来た狼人
は、重くて開けられない目をググツと無理矢理開かせる。

彼女の深青の瞳には、自分の惨めな姿が映し出されている。それを
衰れに見ることもなく、彼女はニツコリと微笑んだ。

「君は、強さを求めているんだな。もう何処のファミリアに入ると
かは決めたのかい？」

「……………」

その問いに、狼人はフルフルと首を振る。

先ほど、入ろうとしたファミリアに門前払いを受けた拳句攻撃され
たのだ。もう彼は何処を行けばいいのかわからない。ここで野垂れ
死にしようかと一瞬でも考えた程にだ。

狼人の答えを聞いた女神は、満足そうに頷く。

「そうかそうか、決めていないんだな！……実はな、ボクのファミリ
アにはまだ誰も眷属子どもがいないんだ。君がもしよければだけど、良かつ
たらボクのファミリアに入らないかい？」

「……………」

それは、女神の慈悲なのかどうか、彼には判別出来なかった。

だが彼にはその言葉に、とても突き動かされた。

まだ誰としてもいない、底辺地位から始まる弱小ファミリア。

今ここで眷属になっても、まだ自分しかいない。こんな女神のここ
ろの眷属になって、自分は強くなれるのだろうか？

「……………」いや、だからこそ強くなれるかもしれない。

最初から、強いファミリアに入っても駄目だ。いつも上を見上げて
はダメだ。それだと、いつかは押し潰されてしまう。それを越えるた
めにファミリアに入っても、ダメなんだ。

それに、ここから新しいファミリアが作られることなど……とて
も燃えるじゃないか。

「……………」ああ、入る。俺は、テメエの眷属になってやる」

不敵に微笑む狼人に、女神は「そうか！」と顔を輝かせる。
徐々に雨が晴れていき、雨粒の音が無くなった時、彼らの『冒険』は始まるのだ。

「ボクの名前はヘステイア！ボクは君を絶対に裏切らない。そして、いつでも君の味方だ。ここからボク達のファミリアは始まる。最初は大変かもしれないけど、でもいつか、このオラリオをびっくりさせるようなファミリアになってやろうぜ！」

差し伸べられた女神——ヘステイアの手を、狼人は迷うことなくガシリ！と掴む。

灰色の毛並みが特徴の彼は、ギラギラとした黄金の瞳で、ヘステイアの手を強く握った。

そして彼は、名を告げる。

「ベート・ローガ。俺は強くなるためにテメエのファミリアに入る。足を引っ張るんなら、俺はテメエが神でも容赦しねエ」

「——ハハハ！威勢がいい子どもはボクは好きだよ！」

それじゃあ、恩恵を刻みに行こうか！

握り返された手の暖かさは、彼の心にも強く伝わり、彼はふわりと風に押されるような形で立ち上がる。

ここから始まる。

彼の、ファミリア・ミイリス眷属の物語が。

*

「なあヘステイア。俺はテメエと強くなって、このオラリオをひっくり返せるくらいのファミリアになるって宣言したよな」

ベート・ローガ。その名を知らぬ者は、このオラリオではまずいな
いと考えていいであろう。

まだ世界に名を轟かせていない新規のファミリアの眷属、だがその
驚異的な速さでL.V.を駆け上げた男。その男に、オラリオの神たち
の興味は向いていった。

デイトゥス
神会でもベートの話題は上がり、神たちの悪ふざけが始まって二
つ名が決まっていた。

数々の神たちが出した二つ名の案。その中でベートの二つ名とし
て決まった名。

その名は『凶^{ヴァナルガンド}狼』。

敵を食い荒らす獯猛なる狼人という情報その他から、この名がピツ
タリだと神たちの意見は一致した。

それから数年。彼は自分一人の力で、ここまで登ってこれたのであ
る。眷属が彼だけの今、ベートはソロでしか潜ることが出来ないが、
一人でどんだん下の階層に行つては、何日も潜つて帰つてくることも
しばしば。

その度にヘステイアの不安は募つていくばかりであったが、金を稼
ぐにはやはり泊まり込みでモンスターを狩つた方がいい。と頭が脳
筋のベートはそう結論づけてしまった。

そこからまた数年の時が経ち、ベートはソロで何週間もダンジョン
で泊まり込みをすることが多くなり、現在疲れ果てたベートは何週間
ぶりの拠点に帰ってきたのである。

ここで冒頭に戻ろう。

「大体お前は勧誘もせずになだせつせとじやが丸くんを売ってるだ
けじゃねえか！それやるんだったら眷属を増やしやがれ!!」

「ボ、ボクだつてやってきたお客さんをちゃんと勧誘してるさ！そ
れでやって来たこともあっただろう!」

「大半はこの拠点を見て止めてるじゃねえか!」

「ぐぬぬぬ……」

歯ぎしりをして何も言い返せなかったヘステイアだが、思い出したかのようにベートを指さす。

「そ、それだったら君もだろう!? せっかく連れてきた子供達が、君の一睨みで逃げていくんだからなあ!」

「ぐっ……!」

そのヘステイアの言い分に、ベートの言葉が詰まる。

実はヘステイア・ファミリアに入団したいと思う子供達はたくさんいたのだ。しかし大半はこのボロボロの拠点を見て帰っていき、そして眷属のベートの睨みや罵倒で帰っていくのである。

自分にも非があると何も言い返せなくなったが、その後ハツと嘲笑する。

「覚悟がねエ奴なんぞ、このファミリアには必要ねエよ」

「たく……もうちよつと仲良くしてくれないかい? 君のことを恨んでいる子供達もいるって、神会でも話題が上がったよ」

「それ程貧弱な奴らだったんだろ。噂でコソコソ吠えている奴なんぞ。だから強くなれねえんだよ」

「ああああ……狼人の特徴でもあるんだけど、なんだかなあ……!」

頭を抱え込むヘステイアを一瞥して、ベートはドカリと寝転がる。数年。もう数年経った。ファミリアに入団したおかげでLv.は現在まで上がっている。自分でも、前よりは強くなったと実感している。

だが、まだ足りない。もつと強さを極めるためには、もつと下の階層へ行かなければならない。

しかし眷属一人のベートでは、下層に行くのは非常に困難なことであつた。遠征に加えられる可能性も、このファミリアの地位を考えてあまり期待しない方がいい。

もつと、もつと戦いたい。そしてもつと、強くなりたい。

ベートはピクピクと獣耳を動かして、瞼を閉じる。それだけで、彼はすぐに夢の中へと落ちていく。

ヘステイアが何かを喋っているような気がしたが、帰ってきて疲労

困憊の彼には、その言葉を聞く気力もなかった。

やがて彼の意識は落ちていき、どっぷりと夢の世界へ落ちていく。

「やったよベート君！新しい子が増えたよ！」

「ウガッ!?!」

その数時間後、ヘステイアのタツクルで彼が無理矢理目を覚まされるのは別の話。

憧憬する白兔との邂逅

どうも、ベル・クラネルです。今僕は、勧誘してくれた神様のホームに来ています。

数々のファミリアに門番払いを受けてしまった僕ですが、慈悲深い神様のおかげで、僕はやっとファミリアに入ることが出来ました。

「どうやら眷属は僕の他に一人いるみたいです。神様が「怖がらないでくれよ?」と言っていました。出来れば仲良くしたいなあと思っています。」

そう思っていた時期が――僕にも、ありました。

「……………」
神様、僕はもう泣きそうです。

*

ベル・クラネル。ヘスティアに連れてこられた、貧相な体の男。まるで白兔を連想させるかのような風貌の男だった。

ヘスティアは不安そうにベルとベートの行方を見守っている。かつてこれで入団を拒否した者達がどれ程いたのか。ベートに至ってはベルをあらん限りに睨み続けるしで、ヘスティアはゴクリと唾を飲む。

その状態が暫く続いた後、口を開いたのはベートだった。

「おい、何縮こまってやがる」

「……………え?」

「雑魚のように震え上がってんじやねエよ。虫唾が走る」

ああ、始まった。とヘスティアは項垂れた。

狼人の特徴とも言えなくもない、罵声の羅列。その火の粉が全てベルに降りかかる。

「てめえは何の為にこのファミリアに入ろうとする」

「軽い理由でこのファミリアに入るなら、俺が許さねエ」

「この世界は、てめえみてえな雑魚が来るところじゃねエんだよ」

「雑魚は雑魚らしく、都市外でのんびり農地で耕してろ」

(……………あれ、意外に優しい)

不意に、ヘスティアはベートの言葉の異変に気づく。いつもは容赦なく罵倒するのに、今回に至ってはベートも優しめの様子だ。だがそれはヘスティアにしかわからず、ベルの心にベートの言葉が突き刺さっていく。

それに気づいているにも関わらず、ベートはギロリとベルを見下した。

「どうした。何か反論したいならやれよ。雑魚の吠え面を無様に晒したいんならなア。あ？全部事実だろ？半端な覚悟で夢見てんじやねエよ雑魚が」

「……………が」

「あ？」

このまま泣いて帰るかと思ひ始めたベートの耳に、か細いベルの声が響いてきた。

ベートとヘスティアはベルの方を向く。顔を俯いていて表情は何えないが、僅かに肩が震えていることがわかっていた。

「……………ぼく、は」

ベルの口が紡ぐ。

だが直後、バツと顔を上げベートと視線を交わらせたベルは、決意の眼差しでこう吠えた。

「僕は!!英雄になりたいんです!!」

*

言ってしまった。

ついに、言ってしまった。

僕は顔が徐々に熱くなつていくのを感じながら、やってしまった感を味わった。

この人が言っていることは全て事実だ。僕はゴブリンも倒せないし、とても弱くてすぐに負けてしまう。

だけど、僕にはある夢がある。

それは、英雄になること。それが、僕の夢だ。

夢と目的は違う。僕は日々英雄に夢をみて、そしていつか、皆を守る戦士になりたいと思っている。

その想いを、この人にぶつけるんだ。

僕はこのファミリアに、神様のファミリアに入りたい！

たとえ嫌われてもいい。だけど僕を見つけてくれた神様の元で、英雄になりたいんだ!!

「……………ククッ」

ジツとこの人を見ていたら、ふと肩を震わせて笑い始める。

「クハハハッ！ハハハハッ!!」

その瞬間、この人は大きく笑い出した。

何故笑ったのか、それは僕に安易に予想できた。

恐らく、僕の夢を笑っている。いや、嘲笑っていると言つてもいいであろう。直後に「お前が英雄？笑わせんじゃねえよ！」という罵声が飛んでくるに違いない。

ああ、お祖父ちゃん……僕はもう、恥ずかしくて死にそうだよ。それを隠すために、僕は顔を俯かせて、ギョツと目を瞑る。

いや、恥ずかしくてもいい。僕の夢は変わらないんだ。僕は英雄になつて、女の子と出会いを果たすんだ!……いい、いや、最後のは違う!?!最後のは言葉の綾で!?

「そうかア……英雄かア……」

心の中の自分の誤解を解こうとしていたら、あの人が笑うのをやめた。その代わりに、僕のことを射抜くかのように見据えてきた。

「……いいじゃねエか、英雄」

「……………え？」

この人の言葉に、僕は思わず聞き返した。

依然この人の瞳は変わらないけど、その口角が上がっているところを見ると……認めている、と考えていいのだろうか。

「まあ、覚悟は本気つてとこだな。それに、俺がボロクソ吐いてもテメエは逃げなかった。それだけで充分素質はある」

「……………じ、じゃあ……………」

「俺の名はベート・ローガ。認めてやるよ、テメエのファミリア入団を」

この人……ベートさんに認められた瞬間だった。

僕は歓喜に震えた。あんなに侮辱してきたベートさんが、認めてくれた瞬間。こんなの、嬉しくないはずがない！

やりましたよ、神様！という眼差しを神様に送ると、神様はポカーンと口を開いて固まっていた。どうしたんだろう。

「だがな、もしテメエが雑魚に成り下がった時は、その時はテメエを蹴り落としてやる。その覚悟もしとけ」

……………どうやら、まだ認められていないようだ……………。

*

ヘスティアに恩恵を刻んでもらったベルは、嬉しそうにギルドへ向かっていった。

そのことを再確認すると、ヘスティアはグルリ！とベートの方へツイントールを揺らして振り向く。

「べ、ベート君!?!さっきの言葉、嘘じゃないんだね!?!」
「あア?」

「べ、ベベベベベル君を!!認め!!たんだよね!?!」
「……まあ、そうだな」

「いやったああああああああああああ!!ベル君ありがとうとおお
おおおおおおおおお!!」

ベートへの確認も取れた女神は一心不乱に喜んだ。

だって、ベートが認めるなど滅多にないのだ。いつもボロクソ言っ
て泣かしてきたのに、今回はベルの覚悟を認めてくれた!!こんなの、
嬉しまずして何になる!!

今なら彼に何でも買ってあげてもいいかもしれない(ベートが集め
てくれた資金からだ)。それくらいに、ヘステイアは嬉しいのだ。

「こんなの、飲まなきゃいけない!よしベート君、ベル君が帰っ
てきたら歓迎会だ!手伝ってくれ!」

「面倒くせエ、一人でやれ」

「何イ!?眷属かぞくが増えたんだぞ!?!」

「俺はさつき帰ってきたばっかなんだよ。休ませろ」

「ぐぬぬぬ……!反論できない……!で、でも何かやってあげてく
れ!というか、ベル君を支えてやってくれ!!」

「……………」

この神は何故こうもあの少年に執着しているのだろうか、とベートは
イライラした様子でヘステイアに背を向け続ける。

それよりも、彼の脳内ではある言葉が繰り返し反響していた。

「……僕は、英雄になりたいんです!!」

(英雄、か……)

強者だけが上り詰めることができる、至高の存在。

その存在を目指す冒険者など、探せばいくらでもいる。そして、ど
んなに無謀なのかも知っている。

だが、あの少年は、あの少年の瞳は。

(……………赤い)

燃え盛るような純情の紅玉の瞳。

真っ直ぐにその背中を憧憬している彼に、ベートは少し期待している。

(……………)

まだ、かの少年はここから始まったばかりだ。

なら自分は、彼が自分を追いかけるよう、もつと強くならなければならぬ。

もつと強く、もう弱者にならないために。

未だ騒いでいるヘステイアを一瞥したベートは、今度こそ深い眠りについたのだった。

「ベートくううううん!!ベル君がダンジョンに一人で رفتちやったよおおおおおお!!」

「グホアツ!?!」

その後、ベルが一人でダンジョンに赴いたことに号泣したヘステイアが、ゆつくりと眠っていたベートに向かって突進するのは別の話。

逃げた白兔と焦燥する凶狼

ベルがヘステイアファミアに入団して数日。ベートはダンジョンに訪れていた。

背中に背負ったバックパックに回復薬を詰め込み、万全の準備を整えている。様々な方面から来るモンスターを瞬殺しながら、ベートはさらに下へ下へと降りていく。

第二十二階層。ベートがソロで潜れる階層のギリギリラインだ。

ここからはソロでは厳しいところもあるが、ここよりも深いところをベートは潜ったことがある。多少苦戦はするが、死にはしない。ベートはそう確信している。

だが今日は長居をするつもりはなかった。今日はこの短時間でしっかりと魔石を集め帰る予定である。

理由は最近潜りすぎとヘステイアに注意されたからだ。今のファミアはベートが稼いだヴァリスで保っていると言つても過言ではない。だがその代償にベートが無茶をするので、見かねたヘステイアが「深くまで潜るのは禁止!!」とベートに言い放ったようだ。

もちろん反対したが、ヘステイアの言い分も最もだし、これ以上無茶をして支障が出て困るとベートは苦渋の決断に踏み切る。だが二十二階層までは行かせてくれと懇願し、そこまでならとヘステイアの許しも得た。

貯める時は、貯める。狩る時は、狩る。その意志を持って、向かってくるモンスターの群れへ、自ら突っ込んで行った。

*

「こんなもんか」

バックパックに溜まった魔石の重さから、ベートはそう決めつける。疲れきった体に回復薬を流し込み、傷や疲労を癒した。

周りにはモンスター死骸がうじゃうじゃといる。もうすぐ、黒い粒子となって消えるであろう。

モンスターからあるだけの魔石やドロップアイテムを手に入れたし、帰るとしよう。とベートは顔を返し、上に続く階段へ登り出した。リヴィラを通り抜け、階層主がいるはずの広間を抜け、どんどん上へ登る。

途中、冒険者とすれ違った時に睨まれたが、どうせいつものことだと直ぐに忘れた。

「よっ……と」

持ち前の俊足で軽々と階層を上がる。今の階層は十五階層。この後は、ものの数分で地上へ登れること間違いなしであろう。

あまり遅くさせるのも、とベートはヘステイア達のことを思い浮かべ、少しペースを早める。いつもはダンジョンに一週間くらい籠もりきるのだが、入団したベルに有らぬ疑いをかけられても迷惑だ。

ペースを速めたおかげか、一気に五階層分を駆け上がることが出来た。霧がかかる第十階層を、モンスターを殺しながら歩いていく。もちろん、魔石やドロップアイテムを忘れずに。

「……………」

九階層へ続く階段を登ろうとした時、上の階層から何かの音が轟くのが聞こえた。

聴覚や臭覚に優れている彼は、その情報から記憶にあるモンスターへと当てはめていく。

そして、ピッタリと一致するモンスターがいた。自分がLv. 2の時、苦戦しながらも勝ったモンスター。

「この足音や臭い……ミノタウロスかっ?」

Lv. 2にカテゴリされている、『ミノタウロス』。並の冒険者じゃ全く歯が立たないモンスター。その硬質や強靱な力に一時期ベートが生死を彷徨ったものの、今では軽々と倒すことが出来る。

そのミノタウロスの足音が、上の階層で響いている。

何故だ? 上層には、ミノタウロスなんて存在しなかったはずだ。なら考えられる可能性は……誰かが倒し損ね、ミノタウロスがここま

で逃げてきたということ。

「チツ……！」

いつもは放っておくのだが、同じ眷属の少年ローベルのことを思い浮かべると、いてもたってもいられなくなった。

もしこのままベルがいる上層まで登ってしまったては、新米冒険者が次々に虐殺されてしまう。その中に、ベルの姿もあるのかもしれない。

冒険者に憧れていた彼だ。恐らく今日も潜っているはず。ならここで仕留めておいて損はない。

持ち前の俊足で階段を駆け上がろうとした時だった。

「待ってー！」

後ろから、小鳥のさえずりのような美しい声がベートに向かってかけられた。

あ？と彼が不機嫌そうに振り向くと、霧に紛れているある少女が視界に入る。

長く繊細な金色の髪。上質な軽装の装備。そして輝くは、彼女の手デュランダルに持っている不壊属性の武器。

ベートは彼女を知っている。いや、このオラリオで彼女を知らない冒険者はいない。

「あの、その、こっちにミノタウロスは来ませんでしたか？」

彼女の名はローアイズ・ヴァレンシユタイン。

二つ名は『剣姫』。そしてローベートが越えたいと思っている、人物。

アイズはしどろもどろになりながらも、要件を伝える。どうやらあのミノタウロスは彼女が取りこぼしたモンスター……いや、遠征の帰りに『ロキ・ファミリア』が取り逃がしたミノタウロスの一体だそう

だ。
はた迷惑な奴らだ、とベートは心の中で悪態をつきながらも答える。

「ミノタウロスの姿は見てねえが、ミノタウロスの音や臭いは上の方でしてる。恐らく、ここから上層に向かったんだろう」

「…………ど、どうしよう…………」

わかりやすくアイズが狼狽える。かの剣姫のこんな姿を拝めることが出来たのは正直心地いいが、こちとら団員の命がかかっているのだ。今のベートにとっては、その姿さえも苛立ちに変換されてしまう。

ベートはあからかさまに重く溜息を吐く。

「ミノタウロスをぶっ殺すんだろ？俺ならミノタウロスの場所は探せる。付いてこい」

「……………あ、ありがとうございます」

アイズが感謝を述べた後、直ぐに走り出した。

だが同じLv. 5でも、脚では圧倒的にベートの方が速い。どんどん引き離されていく距離を、アイズは必死に食らいついていく。

途中、向かってくるモンスターを蹴り殺したり斬り殺したりして、彼らは五階層まで駆け上がってきた。まだミノタウロスの臭いは残っており、未だに何処かを動き回っている。

「この階層が強いな…………ミノタウロスはまだここにいやがるってわけか」

「ツッど!?」

ベートは臭いと音、アイズは鋭い視覚で探っていく。

静寂が訪れ、モンスターも生まれてこない空間。息を潜め、ミノタウロスの動向を完璧に察知していく。

「……………うわああああ!!」

「!?!」

突如、ミノタウロスが大きく動いた途端、冒険者の悲鳴も響いてきた。

まだ少年のように高い声の悲鳴が、この迷宮内で響いている。同時に、モンスターの攻撃も轟音と化してベートの耳に入っていた。

「チイツー！雑魚が見つかったのか!」

「どっつ?どっくに……………」

「こつちだ、剣姫!こつちにミノタウロスがいる!」

ミノタウロスの居場所を完全に把握したベートは、アイズの返事も

待たずに飛び出した。

ここからそう遠くはない。自分の脚力だったら一瞬で追いつく。ここで、ミノタウロスで、騒ぎを大きくするためにはいけない。

音と臭いが近くなった。同時に、追いかけている冒険者の匂いも嗅ぎ分ける。

(……………あ?この匂い…………ツ!)

その匂いを嗅いだ瞬間、ベートの動きが疎かになった。

いや、そうならざる終えなかった。

この匂いは、つい数日前に覚えた匂い。入団して間もない、あの新米冒険者の匂い。

「ベル……………!?あいつ……………」

今、ミノタウロスに追いかけているのはベルだ。

だが早過ぎる。何故もうこの五階層にいるのだろうか。まだ彼は経験が足りないというのに。

「うわあああああああああああああああああああツツ!!」

『ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「ベル!!」

疎かになった足を無理矢理動かし、ベートはベルの元へ急いだ。

そして、追いかけた先には、ベルがミノタウロスに追い詰められている場面だった。

「ベルツ!!」

ベートはすぐ様、ミノタウロスを殺しにかかる。

——だが、それよりも早く金髪の戦士が斬撃を繰り出した。

ブシャリ!とミノタウロスから血潮が噴き出す。壁にも、地面にも、少年にもかかったとす黒い血液を見て、ミノタウロスは確かに狼狽えた。

「ふっ!!」

その隙を逃さず、アイズは見事な剣捌きでミノタウロスを切り刻ん

だ。

絶叫にも異なる異質な咆哮は、無念にも迷宮内に吸い込まれていく。ゴトリ、と落ちた魔石には目もくれず、アイズは呆然とへたりこんでいる白兔に、手を伸ばした。

「……大丈夫、ですか？」

「……ここから、白兔ベルの新たなる冒険のページが描かれる。

*

「あーあ。ベル君もベート君もダンジョンに行っちゃったし、暇だなあ」

今日は何も予定がないヘスティアは、一人用のベッドを存分に使っていた。

ここの拠点の備品は、全てベートが買い揃えたものだ。最初の頃の自分は全然稼ぎがなく、懸命に稼いだベートがあればよこれよと色々買い揃えたもの。だが本当に必要なものだけで、他の必要にならないものは一切買っていない。

ヘスティアはその一つのベッドに顔を埋め、ぷくりと顔を膨らます。もちろん、対象は眷属達だ。

「男の子っていうのは、本当に冒険が好きなんだな……」

でももうちよつと休んでもいいだろう……、とポカポカとベッドに愚痴を零していると、扉の方からガタリ！という音が聞こえてきた。ヘスティアがバツと顔を上げると、扉の先からなにやら慌てた音が響いている。

「……おい！ベルがこっちに来なかったか!？」

扉を壊す程の勢いで扉を開けたのは、ベートだ。

若干汗を滲ませている彼に余裕が無いように感じる。その琥珀色の眼の焦点が合わないところを見るに、彼に何かあったのかと察することが出来た。

ヘステイアはカチカチと固まりながらも、震えながらも伝える。

「い、いや……来てない、けど?」

「じゃあギルドか!」

そう聞いたベートは、扉を壊したまま走り去ってしまった。

冷たい風が入る中、ヘステイアは枕を抱いたまま意気消沈するしかなかった。

「……………なん、だったんだ?」

「ベエエエエエルウウウウウウツツ!!」

「ひえっ、ベートしゃあん!!」

ギルドの扉を蹴ってスライディングして入ってきた狼人の青年に、ベルは顔を青くした。

同じく、ベルと話していたエイナも彼の方を凝視して、目をぱちくりとさせている。

事の発端を生み出した狼人……ベートは、船若と言っても過言ではない怒号の表情で、ベルに詰め寄った。

「よオベルウ、探したぜエ? テメエがきつたねエ牛野郎の血を浴びやがるから、探すのに手間かからせやがって……」

「べ、ベートさん……お、落ち着いて……」

「落ち着いてだア? おいおい、まだ雑魚の段階だっていうのに五階層へ潜ったのは何処のどいつだ? 余裕ぶちかまして意気揚々と潜って死にそうになったのは何処の兎だ? 挙げ句の果てには惨めに悲鳴上げながら血だらけで街中駆けたダツセエ臆病な白兎は何処のドイツだ!? あア!?!」

「ぐ、ぐめんなさい!! このとおり!! この通りですうううう!!」

凄みのある剣幕でまくし立てられ、ベルは見事なジャパニーズ土下座を繰り出す他なかった。エイナはエイナでベートの意見に賛同していて助け舟を出してくれそうにない。

「今だけ、この場を地獄だと思ったベルは悪くない。」

「大体なあ！テメエは礼を言うことも出来ねえのか腰抜けが！」

グサツ！

「あんな変な奇声上げられたら、同じ団員の俺にまで迷惑が降りかかるだろ！」

グササツ！

「くっせえミノタウロスの血をばらまきやがって、あの腑抜け共が一体どんな目でテメエを見てやがる!？」

ゴツンッ！

「もつとテメエは最低限の強者としての威厳をー！ー!!」

「あの、ローガ氏、ベル君、もうノックアウトです」

さすがに見兼ねたエイナが、ベートを宥めた。

ベルはプスプスと音を立ててズウーン、という効果音がつきそうな程に落ち込んでいる。だがベートは反省する気がないらしく、逆に言い足りないようだ。

「ハッ、自業自得だろ。これで反省しやがれ」

「……………はい」

「これに懲りて、もう私のいいつけを破っちゃダメよ。ベル君？」

「承知しました……………」

「じゃあ魔石、換金してきてね」

「わかりました……………」

フラフラと、魔石の入った袋を換金所へ持っていく。

ギルドの横へ位置づけられている換金所に魔石を置くと、直ぐに二、三枚のヴァリスが出された。

「二〇〇〇ヴァリスくれえか……………ちんけなもんだな」

「うっ……………こ、これから稼ぎます……………!」

「取り敢えず今日は帰るぞ。チツ、全く世話の焼かせる……………」

「あ、待ってくださいいベートさん！」

早々に出て行ってしまったベートを、ベルは追いかける。背後でエイナが引き止める声があるが、ベートは振り返らず、唯一ベルだけが満点の笑みで返した。

「セようならー！また明日ー！」

「……………もうっ」

声では怒りが混じっていようと、表情はとても優しそうである。

ベートとベルがもう完全に見えなくなるまで見送った後、エイナは背伸びをして自分の仕事へ戻るのだった。

(……………そういえば、今回のローガ氏、なんか変だったなあ……………ベル君に対して優しかったような……………)

*

「ハア……………」

「そ、そんなに溜め息を吐かないでください……………」

夕方、殆どの冒険者がダンジョンから帰っている時間帯で、ベルとベートは肩を並べて歩いていた。

先程ベートからお叱りを受けたベルだが、今では少しだけ立ち直っている。そもそも自分が悪いので仕方が無いと理由をつけて。

一方、ベートはここまでの疲労が出てきたのか、ことある事に溜め息を吐いていた。溜め息を吐くと幸せが逃げると聞いたことがあるが、全くもってその通りかもしれない。

「べ、ベートさああん……………何か言ってくださいあああ……………」

「うるせエ黙れ」

「ごめんなさい……………」

ベートが小さく怒鳴るだけで、ベルがしゅんと項垂れる。今のベートに逆らったらダメだと、脳が信号を送ったかのように反射的に謝った。

そんなベルを一瞥して、またベートが「はああ……！」と、溜め息を吐いた。本当の白兔になってしまっているのではないのかという少年の頭を、思いつきり叩く。

「イツツツダアアツツツ?!?!?」

Lv. 5の半分ほどの力を食らったベルは、その場で蹲った。どうやら相当痛かったらしい。当たり前だ。ベルとベートの間には超えられない壁が存在している。そんな攻撃を地べたで存在するベルがくらったら、堪らない攻撃なのである。

天と地の差がある攻撃をしたベートは、悪びれることなく歩き出した。

「ま、待ってくださいああああい!!」

その後ろを、頭を抑えながら涙ぐむベルが、追いかける。

一連の情景が一瞬にして起こったメインストリートは、いつも通り活気に溢れ、彼らの姿を覆い隠す。

誰にも注目されることなく、彼らは主神が待っているであろうポロポロの教会へ、足並みを揃えずに歩き出した。

「おい、知ってるか」

「あ？何がだよ」

ふと、メインストリートを住宅の屋根で防寒していた男神達。その内の一人が、隣にいる男神へ何かを問いかける。

もちろん問いかけられた男神は何が何だかわからず、聞き返す。

男神……わかりやすく言えば、猫目の男神はニヤニヤと悪い笑みを浮かべて話し始めた。

「あの凶^{サブナナルガンド}狼だよ！見ただろお前も」

「ああ、見たがそれがどうかしたのか？」

「あの凶狼が、嫌がらずに、まるで親のようにあのガキを殴ったのをお前は見なかったのか!?!」

その情報ネタに、もう一人の男神……金髪の男神が、雷でも落ちてきそうな勢いで、驚愕した。

「なん……だと……!?あの凶狼が!？」

「一大事だろ……!?あの凶狼がだぜ!？」

こりやスクープスクープ!!とはしやぎ始める男神達の背後で、ヌツと数珠を身につけた男神が現れる。

「おおっと！俺も忘れてもらっちゃ困る!」

「誰だ貴様!？」

「俺達は今重大な話を……!」

「ハツハツハ！極上の情報ネタを持ってきたというのに、そんな態度を
しているのかねえ!？」

「くれえ!!いやください!」

数珠の男神に、二人の男神はジャンピング土下座をしてさらなる情
報を求め始めた。

それに上機嫌になりながら、数珠の男神はニヨニヨと、凶狼が去つた道を一瞥する。

「俺は見てしまったのさ……心配してねえとあの少年に向かってツ
ンツンしていた凶狼だが……」

「凶狼だが……!？」

「……その一人の駆け出しの少年を探すために、血相を変えて街
中探し回っている姿を俺は見てしまったのさ!!」

「ツンデレキタコレええええええええええええええええ!!」

数珠の更なる情報に、二人の男神はさらにヒートアップする。

「今まで暴言吐いてた男があ!？」

「男があ!？」

「今まであしらって『雑魚は興味ねエ』って格好つけてた男が!？」

「男があ!？」

「二人の少年の為にあんなに体をクタクタとさせて探し回った!？」

「それって何処のツンデレええええええええええええ!!」

「俺、今日程神でよかったと思つたことないよ……!!」

「ここからあの子のツンデレが發揮するんだね……!長かった……」

！」

「思えばあの時からだな……！」「テメエのことなんて一度も考えたことねえ！」と、めっちゃ美人の子を罵って去っていき、それをネタにして神会で荒れたあの日を思い出す……！」

「そして次の日、ダンジョンで死になつたその美人ちゃんを助けたんだろオ!？」

「しかも「助けたわけじゃねエ。狩りたいから狩った」って決め台詞を吐いたっていう噂だ」

「ツンデレテンプレキタアアアアアアアアアアアアツツツ!!」

男神達が何で盛り上がっているのかわからない下界の者達は、ただ騒いでいる男神達に冷たい目を送るだけであった。

「……！」

「ベートさん?どうしました?」

「うるせえ……さっさと歩け！」

「は、はいはい!!?」

羨望する凶狼

「ベルくうううううん!!大丈夫かい!?け、怪我はないかい!?どこか具合が悪いところとか!?」

「だ、大丈夫ですよ神様ああああああああ!!」

ベルとベートがホームに帰って待っていたのは、ヘステイアタックルであった。

ベルが何でドアが壊れているのだろうかという疑問を持った瞬間に、ヘステイアがベルに抱きついて体のあちこちを調べ回る。

正直、何故こんなに心配されているのかベルにはわからなかったが、ベートの含み笑いで何故か全てを悟ったような気がした。

「ベート君が慌ててベル君の場所を聞いてくるから何事かと……ッ!!」

「言うんじやねえよこの駄神がああああああああアツツ?!?!」

「によわああああああああああああああ!!」

ああ、やっぱり心配してくれてたんだ。

頬の伸ばし合いっこをしている二人を、ベルは何とも和やかな瞳で見つめることが出来たのであった。

若干頬が赤くなっているヘステイアが稼いできてくれたお金で、今回の夕食はじゃが丸くんパーティーとなった。

各自、お好みの塩をかけてじゃが丸くんを吟味し、今回のことに話題を膨らませていく。

「ミノタウロスにあつたあ!?ほ、本当に大丈夫だったのかい?」

「はい、ヴァレンシユタインさんに助けていただいて……」

「そして自分から逃げていったと」

「ぐっ……」

「まあ、そのヴァレン某君のことは別にいい。問題は……君がそのヴァレン某君に恋心を抱いている事だあ!」

「絶対、神にかけても無理なことだな」

「神様もベートさんも酷いです?！」

容赦ない言葉に、ベルは涙目になる。だがベートもヘスティアも悪びれることなく、ただ黙々とじやが丸くんを食べ進める。

やがてじやが丸くんパーティーが終われば、次は眷属達のスティタス更新である。……最も、今回はベートは更新しないため、ベルだけになつてしまおうが。

「……………」

「神様?！」

スティタス更新をし終わり、ヘスティアがベルのスティタスを確認していた時だった。

突然ヘスティアの動きが止まり、ある一点を凝視し始める。不審に思ったベルが声をかけたが、ヘスティアは「何でもない!」と少しどもって、紙に写し始めた。

「はい、ベル君」

「ありがとうございます……やっぱり、あまり上がっていませんね……………」

「そんなことはないさ。ミノタウロスに追いかけて回されたのか、敏捷が結構上がっているよ。もしかしたら、ベート君に追いついてしまいかもね」

「ほぎげ。そんな簡単に抜かされてたまるか」

「ぶー。ベート君のいけずー!」

「子供かテメエ!?!」

「で、でも! 僕頑張りますね! ベートさんに追いつくために!!」
そう言つて、ベルはニッコリと笑う。

ベートはグツと喉を詰まらせ、また溜息を吐いた。

「で、お前なんか隠してるだろ」

「ギクッ」

ベルがぐつぐつと眠つた後、ベートとヘスティアは教会の中で向き

合っていた。

ヘステイアの手には、先程ベルに渡したものと同じ紙が握られている。

ヒエログリフ 神聖文字は、普通なら下界のものは読めない。なので神が共通語コイネーに直して下界のものに翻訳したものを見せている。

その翻訳した紙を、ヘステイアは大切に持っていたが、不審がったベートがそれを追求しようとしていた。

「ぐぬぬぬぬ……」

「オラ吐け。楽になるぞ」

「ぬぬぬぬ……ベート君なら……まだいいか……」

悩んだ末、ヘステイアは持っていた紙をベートに渡す。

「……そう、何も弄っていない、本当のベルのステイタスを。」

「……リアリスフレゼ 憧憬一途？ んだこりゃ」

訝しげにその単語を口にしたベートは、何かを知っているであろうヘステイアの方を見る。

ヘステイアはぷくりとそっぽを向いていたが、やがて悔しそうに、絞り出すように話した。

「……君なら察せれると思うよ。憧れる人を追いかける気持ち……その憧れる人は少なくともヴァレン某君。……つまり、そのスキルは……」

「ほぼ恋心で出現したといっても過言ではないと」

「ううううう!! ヴァレン某いいい……!!」

わなわなとこの場にはいないアイズに恋敵を覚えるヘステイア。それを冷めた目で見ていたベートは、またステイタスの用紙を見る。

憧憬一途……誰も発現したことのない、レアスキル。自分のスキルは狼人としてのスキルが多いため、レアスキルはない。

しかもLv. 1からだ。まだまだ未熟な彼の、第一歩となりえるかもしれない。このレアスキルは。

「……」

不意に、ズキリと胸が痛み始める。

ベートはその胸の痛みに気づきながらもそのままにし、グシヤリ、

と羊皮紙を握りしめる手の力を強めた。

*

憧れる人を追いかけることによつて、彼はローベル・クラネルはさらなる進化を遂げる。ベートはそう直感していた。

もちろん、それで強者となるのなら別にいい。寧ろなつてほしいものである。無様で惨めに晒していた彼に、もうならない為なら。

だがベートはローベルその彼の姿を想像すると、非常に腹が立った。

「がるうああああああああああああああああああああ!!」

向かってくるスパルトイの大群を、ベートは蹴り一つで殲滅する。

攻撃をする暇もなかったスパルトイは、たちまち黒の粒子となつて魔石だけが零れ落ちた。

「……ハア……」

ダンジョン37階層。

未だに人が訪れない大広間に、ベートは何時間もこの場でモンスターを狩っていた。

ベルにスキルが発現したその後、彼は直ぐにダンジョンに潜りモンスターと死闘を繰り返す。

まだ階層主が現れない時間帯まで籠もり続ける彼の額には、若干汗が滲み出ていた。

「……………」

手元にあるポーションをじつと見つめ、やがてそれをバックパックに仕舞う。何時間も狩り続け疲労が溜まり、傷も出来ているというのに、彼は回復は愚か、休憩することもなかった。

スパルトイがダンジョンから生まれ、標的をベートに定める。

ベートはそのスパルトイの大群を鼻で笑い、強化された敏捷と威力

と共に、スパルトイの軍勢へ再び突っ込んだ。

「がるうあ!!」

目の前のスパルトイの頭蓋骨を、膝でぶっ壊す。

そして向かってくる周りのスパルトイは、地面に手をつけて回し蹴りで潰す。

バラバラと魔石が散らばっていき、そして敵の数も増えていく。スパルトイだけではなく、ちゃんと肉があるモンスターがゾロゾロと。

「ぐるるる……!!」

ギリリ、と眼光を凄ませ、ベートはその大群を睨むように見据えた。ああ、イライラする。

とても、収まりきれないくらいにイライラする。

何体も何体もモンスターを狩っても、全然この苛付きが収まらない。い。

奇声をあげたモンスター達が、ベートに向かって突っ込んできている。

「……糞があ!!」

対してベートは、吠える。

「獯猛なる野獣と化す彼を止められるものは、今この場にはいない。」

ただ彼は、モンスターを狩る『モンスター』でしかない。

(……ああ)

俺は今、何でイライラしてるんだっけ。

モンスターの頭、腕、首、四肢を潰しながら、ベートは今更そんなことを考え始めた。

そうだ、ベルがレアスキルを発現した時からだ。

そのレアスキルが、ベルに大きな成果を上げるかもしれないと、自分でそう思ったんだ。

L v . 1で。

(……何だ、考えれば簡単な事じゃねえか)

モンスターはもう、死んだ。

モンスターがいる証拠になるのは、モンスターの体から出てきた魔石だけ。

ベートはその一つをガシャ！と踏み潰し、舌打ちを零した。

(大人気ねえ、俺も)

彼はこの感情を知っている。

まだ駆け出しの冒険者が出したレアスキル。そうだ、それを見て、予測して、想像して。

(……嫉妬、なんてな)

自分にも、あんなレアスキルがあれば強くなれるかもしれない。

この先、このまま強さを求めていたら、もしかしたら自分にもレアスキルが出るかもしれない。ベルのような、何かを追いかけるようなスキルが。

そんな欲すら出てくる程に、ベートはベルが持つスキルに羨望していた。

それを認めたくなくて、ベートはこんなところまで狩りに来ていた。

「……………ちくしょう」

最後まで惨めで、無様な自分に、ベートはベート自身を呪い始めた。

凶狼と白兎の外食

ほぼ八つ当たりでダンジョンに潜っていたベートが地上に戻ったのは、既に日が落ちていている時間帯だった。

バックパックに詰まっている魔石は、これまでよりも集めていると言っても過言ではないであろう。また貯金に回さねば、とベートは疲れにより出た欠伸を噛み締める。

ギルドへの道を辿ると、徐々に民間人や冒険者が多くなっていく。まだ商売をしている商人の通りを通りながら、ギルドの木材の両扉を開けた。

「あ、ローガ氏。お疲れ様です」

ベートを迎え入れたのは、ベルのアドバイザーでもあり、ベートの良き理解者でもあるエイナだった。手元にある資料はある冒険者の資料であるところを見るに、まだ業務中なのだろう。

「おう、ベルの調子はどうだ？」

「はい。ベル君は今日もダンジョンに向かっています。でもいつもより凄く励んでいたような……いえ、別に今までサボっていたわけではありませんよ？なんか、今日のベル君は今まで以上に張り切ったような……」

「いや、いい。理解した」

必死に伝えようとしていたが、それをベートは遮り、止める。ベルが何故突起になっているのか、ベートは既に分かりきっているからだ。

あの剣姫を越えるために、今ベルは頑張っている。そう思うと、先刻までベルに発現したスキルに嫉妬していた自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。

「チツ」

それを隠すように舌打ちをかましたベートは、エイナを過ぎ去って

換金所まで歩く。

十八階層以下の魔石は全て迷宮アンダーリゾートの楽園で換金してきた。後は道中やってきたモンスターをここで換金するだけである。

やがて出された魔石はヴアリスとなって帰ってきた。二万三千ヴアリス。それに迷宮の楽園で換金した金額を足せば、いつもの三分の一の稼ぎとなった。

この稼いだ金額の殆どをファミリアの財産に注ぎ込もう、と換金したヴアリスを袋に入れ、ギルドを後にしようとする。

「あ、ローガ氏」

ふと、エイナに呼び止められ、ベートは振り向いた。

ハーフェルフでありながらもその美しい相貌は目を引くものだ。夕日の光によって彼女のエメラルド色の双眸は、いつにも増して煌めいている。

エイナはベートの琥珀色の瞳をジッと見つめて、やがてふんわりと笑った。

「……ベル君のこと、支えてあげてくださいね」

「……馬鹿野郎が。それはテメエの仕事だろうよ」

ギルドを出て暫く歩く内に、時間帯は既に宵となってしまうた。

今帰ったら、恐らくヘステイアは「遅い！」とベートに突っかかり、そしてベルは苦笑するであろう。そうなつては後々面倒なので、少しだけホームの帰路を早足で帰る。

「……あ？」

だがその時、ある店で立ち止まっている見慣れた姿に足を止めた。いつもの茶色の外套に、雪のような真っ白な肌。彼——ベルはあの酒場で、右往左往としていた。

(何やっつてんだあいつ)

そもそも彼は何故ここにいるのだろう。ホームでヘステイアと仲

良く晩飯を摂っていたのではないのか。そもそもヘステイアは何処へ行ったのか。

数々の疑問を抱きながら、取り敢えず聞けばわかるだろうとベルに近づいた。

「おい、ベル」

「つあ……ベートさんー！」

ベートが声をかけると、ベルは嬉しそうに顔を輝かせた。その表情にベートも頬を緩める。

ベルに何をしているのか問う前に、ベートは酒場を見上げた。

ここは確か……自分が冒険者になった日から通っている、見慣れた酒場「豊穰の女主人」である。何故ベルがこの酒場の前で右往左往していたのか、もしやこの酒場に入るのを戸惑っていたのだろうか。別に戸惑う必要性はないと思うのだが、とベートが心底疑問に思っている時、酒場から一人の少女が顔を出した。

「あ、ベルさんー！」

灰色の髪を一つに束ねた、緑のメイド服を着込む少女は、ベルの姿を視界に収めると嬉々として駆け寄ってくる。

「こんばんわ、シルさん」とベルは恥ずかしそうに彼女……シルに挨拶した。

シルはニツコリと笑って、ベルがこの酒場に来たことの喜びを告げる。それにさらに真っ赤になったベルと、それにまた頬を緩ませるシルのやりとりを、ベートは黙って観戦していた。

「……所で、そちらのお方は……あ、ベートさんー！」

漸くベートの存在に気づいたシルは、ベートに笑顔を向けた。

「チツ、気づくのが遅いつての。……薄々気づいちゃいるが、どうせ、またあのやり方でベルをここに呼び込んだんだろ？」

「えっ」

「シーツ、秘密ですよ」

確信犯的なシルの笑顔に、ベートはまた舌打ちを零した。

実は昔、ベートは彼女のやり口にハマりかけたのである。冒険者になつて数日、そろそろ慣れてきた頃に彼女、シルに「魔石を落としま

したよ」と呼びかけられたのだ。

その時は一瞬落としたのかと思ったが、彼は音にも敏感である。もし落としたのなら即座に気がつくし、そもそも先程全ての魔石を換金してきたので、落ちていることは普通なら有り得ないのだ。

即座に疑いをかけたベートは彼女に凄みをきかせ、淡々と言葉を紡いでいった。そして驚く程あっさりと言状した彼女に、今度はベートが度肝を抜いた。しかもちやっかり「宜しくお願いしますね!」と店の宣伝もしていき、そして用が済んだとばかりに店の奥に姿を消したのである。

こればかりはさすがのベートも「はあ?」となった。そしてあの女に文句でも言ってやろうと態々酒場に足を運んだのだが、料理は美味く、そして酒場の雰囲気も全て気に入ったので、「騙されたとしても金が増えるだけだったしまあいいか」で、妥協したのである。

以来時々酒場に来ては飲み明かし、ヘスティアにブーブー言われていたが……そういえば、L.v. が上がるにつれて来れていなかったな、とベートはふと思い出した。

L.v. 5になってからというもの、殆どの時間をダンジョンに費やしていたので、そもそもこういう場所に来るのも久々なのだ。酒場から聞こえる冒険者の汚い笑い声も、ベートにとっては昔のように思えてきた。

「……丁度いいな。俺もここで飯食ってくか」

「本当ですか?ありがとうございます!」

「ええ!」

「ああ? ンだベル、そんないかにも意外そうな顔しやがって」

「いえ……ベートさんとこうして一緒に食べれるの、初めてだなあと思うと……つい」

「……そういえば、そうか」

ベルに言われて、ベートも気づいた。

こうやってベルと一緒に、何処かの店へ入って食事するのは初めてだ。いつもはホームで駄弁って、ヘスティアの猛攻撃を遠目で見て、そしてそのまま時間が過ぎていく。会話も殆どヘスティアが出して

くれ、それに相槌をうつているようなものだ。

……だからだろうか、こうしてこうやって、ここで食べることを決めたのは。

「……ハッ。おいシル。きつさと席に案内しろ」

「了解しました。お客様二名入りまーす！」

少しだけ胸が向上したベートは、ベルの腕を取って、店の中へ入ったシルの後を追うのだった。

*

彼らに設けられた場所は、人目につきにくいカウンターの角の二席だった。これはシルの配慮なのであろう。

ベルを隅っこに追いやり、ベートはその隣へ腰を下ろす。するとこの店の主人である彼女ーミアがニカリと笑ってこちらに話しかけてきた。

「やあベート！久しぶりじゃないか。大きくなったもんだねえ！アントアの隣にいるのが、シルが連れ込んだ冒険者かい？聞けばアントア、私達料理人を困らせる程の大食漢らしいじゃないか！」

「?!?!」

「ベル……我慢してたんなら言えよ……」

「違いますよベートさあん!?シルさん!?どういうことですかこれ!?!」

ミアに驚きの事実にはベルは瞠目し、それに乗ったベートは憐れむようにしてベルに一言言い、それをベルは一喝して恐らく全ての元凶であるシルに問いかける。

シルは数秒間たつぷりと間を開けて、可愛らしく「てへっ」と答えた。その悪気のない笑顔にベルの声が弱くなっていく。

「まあシルは終始こんな奴だ。気にするな」

「うふふ」

「うふふじゃないですよー!?!」

「あ、ミア酒」

「あいよー」

「そして無視しないで注文しないでくれますかあ!？」

メニユーを見て悲鳴を上げたりお金がなんだで悲鳴を上げたり、本当に忙しいヤツである、とベートはしれつとオススメを頼み、それにまたベルがムンクの叫びのようになるのは別の話。

*

「くくく相変わらずこの店は酒がうめえなあ!!」

顔を赤くさせ、ダンツ!とジョッキを雑に置いたベートは、笑い声を上げながらそう言った。それにミアは「当たり前前よ!」と自信満々に胸を張る。

ベルは仕方なしにベートと同じオススメを頼み、黙々と一口一口食していた。今はパスタに突入しており、口の周りをパスタソースで汚しながら食している。

「あああ……たつぐよお、昨日のテメエにはほんつつとうに世話が焼けるぜエ……」

「ええ……またその話、ですか?」

「酔ってますね」

「酔ってねえよオ!」

シルが冗談交じりに言うと、ベートは食ってかかった。そしてまたジョッキを仰ぎ、中の酒を空にさせる。

頬を赤くさせ、呂律も回っていない。いつもの澄まし顔は何処へやら。今のベートはヘラヘラとだらしなくしているーただの酔っ払いである。

(……酔ったベートさんって別人だなあ)

ベルはムグムグと口の中を動かしながら、隣のベートを見据えた。そしてこれまでのベートとの関わりを思い出す。

確かに、会話が少ないと言えば少ないと言える。彼はいつも遅くまでダンジョンに潜っているの、顔を合わせるもしたら夕食後くらいなのだ。ヘステイアの話によると、ベルが来る前は一人で泊まり込みでダンジョンにいたという有り得ないことをしでかした男である。

そんな男が彼とは……信じられないだろうな、とベルは複雑な顔をした。

(……そういえば、ベートさんの戦ってる姿、見たことないなあ)
ベートはソロでダンジョンに潜る。何処かのファミリアとパーティも組まず、かと言って同じファミリアのベルとは……組む気にはなれなかったのであろう。そのせいか、ベルはベートが戦っている姿を、今まで見たことがなかった。

(どんな風に戦うんだろう。神様の話だと、敏捷が速いって言うたから……攪乱してから倒すやり方なのかな)

モンスターを混乱させ、その隙に攻撃をする……ベルのベートの戦いの予想はこれだった。敏捷がとても良いのなら、そのような使い道をして何も咎められないであろう。実際ベートがどのようなように戦っているのか知らないベルは、こうやって予測するのも実は楽しかったりする。

「……見てみたいなあ」

「何が」

「……ふえっ!?!」

ポツリと声に出していたのを、顔を近づけてきたベートに聞き返された。急にやってきたベートの顔にベルは吃り、思わず椅子から落ちそうになるのを防ぐ。

そんなベルの行動にベートは首を傾げながらも、いつの間にかおかわりを頼んだのか、新たな酒が入ったジョッキをグイッと一気飲みをし始めた。

(……いつか、見れるだろうな)

その綺麗な横顔に少し見惚れ、そして新たな楽しみを作ったベルの

耳に、他の客のざわめきが入る。

何事か、とベルが目線だけで店の出入口を見ると――――途端に、ベルの目が瞠目した。

「おい、ありや……」

「ロキ・ファミリア……」

他の客達が、次々とその名を口にしている。

「ロキ・ファミリア」都市最強を誇る「フレイヤ・ファミリア」と同等の強さを持つ、オラリオ屈指の探索系ファミリアである。【勇者】^{フレイバー}フィン・デムナを初めとした逸材の冒険者が集う、冒険者にとつても憧れの存在のファミリアなのだ。

どうやら今日、ロキ・ファミリアは遠征の帰りだったらしく、打ち上げの予約をしていたらしい。

だがベルはそんなの関係なく、ただある一人の少女にしか目がいていなかった。

「……な、んで……」

まるで絹糸のように流れるような金髪。

ふっくらとした、少女特有のある頬。

そして引き締まった腰に、少女でありながらもそれ程の大きさを持つ双丘。

ベートも彼女を見て、目を細めた。その少女は、昨日ベルを救った恩人であり、ベートが超えるべき相手でもあった。

その美しさと可憐さを持つ、少女の名は――――。

「……アイズ・ヴァレンシユタインさん……」

アイズ・ヴァレンシユタイン。

二つ名【剣姫】の異名を持つ、オラリオ屈指のLv. 5であり、誰

からでも愛されている美しき少女の名であった。

らに舐められるぞゴリア神としてのおお威厳をもてええええ……！
ベルのばかやろおお……」

何個ものジョッキが転がっているのを見て、シルは考えるのをやめた。

「そういえばよお！俺見ちゃったんだよなあ！」

ロキファミアリアの宴が始まって数時間、あるグループの会話がベルの耳に届いた。

それは、ベルがいる席の後ろの丸テーブルにいる冒険者達の会話だった。

彼らの顔が真っ赤に染まっているところを見ると、彼らも酒の飲みすぎで酔っているのだろう。しかしベートのように眠くなっている訳ではなさそうだ。人はそれを酔い潰れそうと言う。

「あ？それって、ダンジョンで焦らしてた奴か!? やつと言うのかよ！何を見たんだ？」

「へへへっ、聞いて驚くなよお」

「勿体ぶらずにさっさと見えよこの野郎！」

「わ、わかったって……めっちゃ笑えるから覚悟して聞いとけよ？」

何故だか、ベルは耳を塞ぎたくなった。ここで彼らの会話を聞いて、何かが起こるような気がした。それは決して良いものではなくて、とても悪い何かを。

三人のうちの一人が、下品な声である話題を口にする。

「どっかのひよっこ冒険者が、あの剣姫に助けられたのをよお！」

時が止まった。

一人が「はあ？」と、上げて落とされたような落胆の表情で続ける。

「それがどうしたんだよ。別に全然面白くねえぞ」

「いやいやそれがさあ！そいつ、剣姫に助けられたんだけど、剣姫に手を差し伸べられたら真っ赤になって逃げてったんだよ！ミノタウロスにくっせー血を浴びてさー」

「うわっ、ダッセー！それって俺達の横を通り過ぎたやつ？」

「そうそう！防具も何も身につけずに貧相な格好でさ！あれじゃあ無様にミノタウロスから逃げ回ってたって安易に予想はつくぜー」

「いや、ミノタウロスはまじやべえから！ってというか何でミノタウロスが上層にいたんだろうな？」

「さあなあ？もしかしたら、あのダッセー雑魚を追い払うために来たのかもな！お前にはまだ早いでちゅよーってな！」

「有り得る！」

ギャハハハツ!!と、下品な声が響き渡る。他の冒険者も騒いでいるのに、ベルの耳には彼らの会話しか耳に入ってこなかった。

彼らの言っている雑魚とはー自分のことだ。ミノタウロスの血を被って、そしてアイズの前から逃げ出したのも、自分だ。

まさか、見られているとは思わなかった。自分のあんな無様な姿を見られていたなんて。

カウンターの下から一步も動けず、ベルは頭を抱える。ベートが静かになったのは、酔い潰れたのかということを確認する暇も、今の彼にはなかった。

ただ、彼らの会話が終わればいいのに。そう願っていた。

しかし現実には残酷で、彼らはさらにベルのことを吊るし上げる。

「そもそも防具も何もなしに5階層に来るなつての！」

「良くあれで生き残れたよな。そこだけは本当に関心するよ……雑魚だけど、な！」

「ていうかそいつ何で真っ赤になってたわけ？それがいまいちよく分かんねえ」

「おつま、わかんねえのか？あれは十中八九、剣姫に惚れてるんだよ」

「ブハハハ!! 剣姫にツ、惚れる!? うっわーやっちゃまったなそいつ！」

叶わねえ恋だつていうのによお！」

「L.V. 1とL.V. 5が釣り合うかつての！テメエはただの引き立て役だつての！それに、劍姫にはあの神がいるから、そもそも求愛なんてしたら俺らがぶっ潰されるだろ！」

「言えてる言えてる！どうせ劍姫は強いやつにしか靡かないしー！」

止める。止めてくれ。

これ以上、自分を惨めにさせないでくれ。

自分の中に、どす黒い何かが紛れ込んでくる。それは自分の体の隅々まで侵食しようとする行動し、余計彼らの会話が耳に入ってきた。

このどす黒い何かを、自分は知っている。

「まあ、そうだよなあー！」

止めてくれ。お願いだ。

聞きたくない。聞きたくない。

しかし、運命は、残酷に彼の道を作り上げていく。

「俺達雑魚が、アイズ・ヴァレンシユタインに釣り合うわけが無いよなあ!!」

その瞬間、ベルの中で何かが千切れた。

*

「ベルさんッ!!」

シルのその呼び声に、ベートの頭は覚醒する。ベルが勘定も払わずに出ていったことは、ベートにも理解出来た。そして、先程からベル

の事をネタにしている外道な冒険者の会話も、頭に残っている。

ベートは確かに酔っている。だが、これくらいで酔い潰れる程ではなかった。だから今何が起こっているのか判断出来るし、自分が今どうするべきかも分かっている。

「……………」

ベートは最後の一滴まで酒を飲み干し、周りにも聞こえるほどにジョッキを力強く、叩きつけるように置く。

それだけで、周りの人間の会話は止んだ。皆が皆ベートに注目し、そしてざわりと騒めく。

「おい、彼奴……………」

「ああ……………凶狼」
ウァナルガンド

「この店にいたのか……………」

ベートは、コソコソの話す彼らに一睨みを効かせた。それだけで彼らは黙り込み、目を逸らし、何事もなかったかのように飲み続ける。

真っ赤に火照った頬は徐々にひいていき、元の白い肌が見せる。酔いも醒めてきたのか、ベートはベルが去った店の出口を見据えた。

「……………はあああ……………世話のかかるヤツ……………」

重く溜め息を吐いたベートは、席を立つ。懐から数枚のヴァリスをカウンターに置き、彼は歩き出した。

「ちよつと、本来の勘定より多いよ」

「あのへつぽこ兎の分だ。そんでその後ぶんどる」

何故多めに出したのかという質問に応えたベートは、先刻ベルをネタにしていた三人組に近づいた。

三人組は突然のベートの姿に驚き戸惑い、ベートに視線を合わせない。忙しない視線にベートの目が細くなると、彼らは一様にヒツと、小さな悲鳴を上げた。

「生憎だが」

ベートが、静かに口を開いた。酒場の人間全ての視線が、ベートの背中に突き刺さる。

ベートの声は重く、低くのしかかっていた。

「俺は今、テメエらに持ち合わせ時間はねエ。テメエが散々笑いも

のにした兎を回収しなくちやならねエからなあ」

「……だから、一言だけ忠告してやる。」

それは、ただの言葉ではない、『忠告』

L v. 5からの忠告は、L v. 1の冒険者でも少なからず嬉しい気持ちはある。だが、相手はあの凶狼だ。人を見下し、蔑み、暴言を散らす、あの凶狼なのだ。何を言われるのか、溜まったものではない。

ベートは彼らに向かって、小さく一歩を踏み出す。それだけで彼らはまた小さく悲鳴をあげ、イスをガタリと鳴らした。

しかし、彼らに逃げ道はない。

ベートは彼らのうちの一人「……」ベルを一番嘲笑していた冒険者に顔を近づけ、告げた。

「……………」

*

貶される気持ちも、見下される気持ちも、嘲笑される気持ちも、一番味わっているのは俺だという自覚がある。でなければ、俺は今、強者としてここにいないのだから。

だからベルが店から出ていった時、少なからず同情し、そして「当たり前前だ」と、心の中で吐き捨てた。

ベルはまだそういう立ち位置だ。言うなれば、彼奴らの言う通りただのひよっこだ。

確かにベルはドジで間抜けでお人好しで弱い雑魚だ。だが、皆誰しもが「最強」なわけない。強者は弱者から積み重なってきた経験があるからこそ、初めて弱者を見下せる。

だから俺は、弱者を沸き立たせる。そして這い上がってきた弱者を

ぶっ潰す。

それを乗り越えてこそ、初めて「強者」というレッテルを貼られるのだ。

だから。

「テメエはテメエの力で、這い上がれ」

倒れ伏せているベルに向かって、言った。

ウォーシャドウの大群により深い傷を負っているベルは、ピクリとも動かない。

だが俺は、彼奴に言う。

「どうした。そんな程度で、あの劍姫に追いつくとも思ってるのか」

ピクリ、とベルの指先が動いた。

やはり、彼奴の原動力は劍姫にあるらしい。

ならそこを、突くまでだ。

「何でテメエが笑い者にされたか、教えてやろうか？それはテメエがまだ『弱者』だからだ。劍姫が細切りにしたくっせー牛野郎の血を浴びて、野郎のくせにピーピー泣いて逃げ去ったテメエの姿は、さぞ彼奴らには滑稽に見えてたよなア。テメエと同じ、Lv. 1から見ても」

ベルは動かない。

「要は、彼奴らの言ってた事は強ち間違いじゃねエってことだよ。もし俺が他のファミリアー劍姫のファミリアにいて、劍姫と一緒にミノタウロスを追って、そしてテメエの無様な姿を拝むーそうになったら、俺は彼奴らの様にテメエを嘲笑った。『強者』としてなア」

ベルの指先が震える。

「だからテメエが怒り狂おうと、こっちは知ったこっちゃねえ。何故なら、全部自分が撒いた種だからだ。テメエが弱いからこうなった。テメエが甘いからこうなった。テメエの軟弱な考えであんなった。全部自分が起こした事だ。それを他人に指摘されてキレるなんざ、本当の雑魚がすることだ。自分がしたことは、自分で責任を持って」

ジャリ、とベルが手をついた。

「だから、今テメエがそんな姿を晒している事にも、責任を持ちやがれ」

ウオーシヤドウが生まれる。ウオーシヤドウは、部屋の中央にいたベルに目標を定め、大群で襲いかかる。

ベルが、しつかりと足で立ち上がる。片手に短剣を逆手に持ち、ポタポタと流れる鮮血にも抗わずに。

ベルは、また剣を奮った。

「テメエはそんな無様を晒してでも、強くなりてえか」

聞こえているかもわからないのに、俺はまだ続けた。

ウオーシヤドウの肉が切れる音だけが響き渡る。魔石だけが落ち、ウオーシヤドウの音もなくなり、ベルの荒い呼吸と、ベルの咆哮だけが、部屋を支配していた。

「テメエは、何を憧憬に背負ってやがる」

そんなのは分かっている。あの夜、ヘステイアに見せてもらったのだから。

ベルの拙い動きが、俺の視界に、俺の瞳に映り込む。彼奴の真っ赤な瞳には、既に俺を認識していない。

「……テメエは、強くなって、何がしたい」

途中から、俺の自己満足のような質問ばかり口にする。

しかし、それをベルが答えることは、恐らくこの先無いであろう。俺が再度この質問をしなければ、の話だが。

ウオーシヤドウの呻き声も消え、ベルの呼吸も安定に向かっている。ポタポタと彼奴の血だけが音を鳴らし、この部屋の静けさを異様に引き立たせる。

「……ベート、さん」

ベルが掠れた声で、俺を呼んだ。

返事をする必要もなかった俺は、無言を貫き通す。

ベルは顔だけを振り返って、俺を視界に入れた。その真っ赤な瞳に、俺の姿が映る。

「……僕、は」

もう体力も尽きようとしているのに、彼奴は俺に何かを言おうとしている。

「……彼奴は、力無く笑って、俺にこう問いた。

「……強く、なれ、ますか……？」

その問いに、俺は嘲笑うかのように鼻で笑い、呆れも含めて言葉を返してやった。

「人にんな事聞くのは、雑魚がやる事だ。……強くなりてエんなら、自分で道を作りやがれ」

ベルは、満足したかのように、その場に倒れ伏せた。

僕は今日、初めて初期位置に立つ

今、ベートはヘステイアと対峙していた。

この一文だけでは何を言っているのか分からないであろう。それもその筈、ベートも何故自分がこんなにも凄まじれているのか、心当たりがないのだ。ベルも半裸でベッドに縮こまって、こちらの様子を伺っている。

しかし大体の予想はつく。ヘステイアが握りしめている紙が、全てを物語っている。

「……ベート君。ボクはね、君にすごーく聞きたいことがあるんだけど」

「……ンだよ」

ベートが面倒臭そうに返した直後、ヘステイアは持っていた紙をベートの眼前に叩きつけ、こう迫った。

「この!!ベル君の!!異常なステイタスの伸びは!!一体何なんだい!?!」

「……予想通りすぎて怖エ。」

ベートは改めて、自分の察しの良さを恨んだ。

全アビリティが異常なまでに上がったベルのステイタスに、さすがのベートも瞠目する。このステイタスの伸びは、ただの努力では計り知れない異質なものであった。

なら何がこうなったのか。まずヘステイアとベートが目をつけたのは、ベルに最近発現したレアスキル【リアリスフレゼ憧憬一途】だった。いや、十中八九このスキルが原因と見て間違いないであろう。そう、ベルのス

キル欄を見るまでは。

ステイタスで目を見開いていたベートの目に、あるスキルが目に入る。これはベルにも見せるので、憧憬一途の事は消されていたが、それはベートを動揺させるに十分なスキルであった。

「……そのスキルの事についても聞きたいんだよ。そのスキル名、読んでご覧？」

ヘステイアが訝しげに聞いてくる。

ベートは操り人形のように、そのスキル名を口にした。

「……【冀望スベラガンドの凶狼】」

【冀望スベラガンドの凶狼】

- ・ 強者を望む限り全アビリティ上昇
- ・ 対象が凶狼の場合、比例して成長する

「……んだこのぶつ壊れたスキル……!」

「でもそれ、ほぼ君が原因で出たんだろう」

「ぐっ……!?!」

ヘステイアの言葉に何も出てこない。しかし、何故こんなスキルが出たのか。原因を探るのならば……ベルが嘲笑された、昨日の出来事しか思いつかない。

しかし自分はベルに何もしていない。ただ言葉を投げかけただけである。なのに何故、こんなスキルが生まれたのか。

「……あ、あの……神様？ベート、さん？」

今まで蚊帳の外にいたベルが、恐る恐る二人に声をかけた。

「その、何かあったんですか……？スキルとか、何か、聞こえたんです、けど。もしかして、僕にも念願のスキルが出たんですか!?!」

「……あー、うん、デタヨデタヨ」

今更ベルを送り出してから聞けばよかったと後悔するヘステイアだが、こればかりはさすがに我慢ならない。只でさえ剣姫によって発現したスキルのこともあるというのに、今度は自分の眷属によって発

現したスキルなど、冷静さを欠けてもしょうがないのだ。

こればかりは、黙ってはいられないであろう。それに自分の眷属だ。憧憬一途のように、他のファミリア関連のものではない。嘘が下手な彼に言うのは本当に、色々な意味で嫌だが……腹を括ろう。

ヘステイアはベートから紙をひつたくり、それをベルに見せた。

「うわあ……！ ついに念願のスキル！ 一体どん………ツツ
!?!?」

視線をスキル項目に移した時、ベルが石像のように固まってしまった。フルフルと手を震わすことも、パクパクと口を動かすことも、何もせずにただあのスキルを見つめるベルに、ヘステイアは「ベル君？」と顔を覗き込む。

ベートはあのスキル名を思い出し、ふと気になったことを口にした。

「……冀望、ねエ……。お前、俺に何を望んでんだ？」

「……ううえっ!? え、あ、え、えええええとですねえっ!? あ、あの！ いや、えつと……!!」

「いや、そんなに顔を真っ赤にしてもな……」

あの昨夜の出来事に、ベルに何か思いが出来上がったのか。それはベートに対しての、強い願い。ならベルは、ベートに一体何を望んでいるのだろう。それが分からなければ、ベートのモヤモヤは晴れなかった。

しかしベルは用紙を握り締め、真っ赤になって首を横に振っている。それは明確な拒絶ではなく……ただの、羞恥。

つまりベルは恥ずかしがっているのだ。そしてこのスキルにも、ベルにも何となく思い当たることがあるのは確定。

だからこそ、ベートはその真意を聞き出したかったのだが……。

「ぼ、ぼぼぼぼ僕！ き、早速ダンジョンに行ってきますねツツ!?」

「え、ちよ、ベルく」

「で、ではああああああ!?」

ベルは今までのものとは比べ物にならない程の速さで衣類を掻き込み、そしてまるで変身したかのように素早く衣類を着て部屋を出て

いった。用紙を握り締めたまま。

「……………んだよ、彼奴……………」

「……………そ、そんなに恥ずかしがること、なのかな……………?」

ヘステイアとベートは、未だに直されていない開放感のある出入口を眺めながら、そう呆然と零したのだった。

*

「馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ……………ツツ！」

本当に、自分は大馬鹿者だ。

「うわあああああ……………！」

こんな、こんな形で現れるなんて。

ベルはメインストリートを抜けた後、噴水の縁に腰かけた。そして握りしめてグシャグシャになった用紙を、もう一度広げる。

「……………ううううう……………」

そして、静かに悶えた。

これは昨日、無我夢中にモンスターを狩りまくっていたベルに形成された、ベートへの強い思いを具現化したものだろう。そうに違いはない。

そう、このスキルを、ほぼベルは理解している。何故このスキル名なのか、何故今、発現したのか。その全てを、ベルは理解しているのだ。

自分と同じ冒険者に貶され、今の自分の弱さを思い知らされた昨夜。それはベルにとっても忌み嫌う日であり、同時に英雄に近づく一歩だと実感している。

だから、モンスターを殺しまくった。ただ夢中に、この悔しい思いを、憤怒を、悲しみを振り払うように。

ウォーシャドウの大群が一時的に止み、ベルの体力が限界に近かつ

たその時、ベルの背後に言葉を投げかける人がいた。それが、ベートだった。

ベートの言葉は全てベルに突き刺さった。そしてそれら全てが正論だと、深々とベルの心に突き刺さる。

正直、ベルはこのベートの声を、あの時は全て幻聴だと思っていたのだ。弱者に興味を持たないベートが、自分に喝を入れるために来るはずがないと思いついていたから。

だからベルは答えなかった。

そして、この幻聴がベルの原動力となる。倒れ伏せていたベルの体をさらに追い込み、そして奮い立たせることで、ベルはさらなる高みを目指す。

ウォーシャドウの大群が再度現れた時、ベルはモンスター達に噛み付いた。自分の弱さを、醜さを、全てモンスターにぶつけて。

その間の記憶はない。ただモンスターの肉を斬る感触と、自身に走る痛み、そして誰かに声を投げかけられている体感だけが、ベルに残っていた。

我に返ったのは、ウォーシャドウを全て殺した後だった。

その時、ベルはベートの方を振り返る。それはほぼ無意識の行動で、ベルの意識の元動いていたわけではなかった。

そしてその時に、ベルは見た。

ベートの眼の奥底に眠っている、『英雄』の瞳を。

ああ、そうか。

ベルはその時に悟った。ベートが何故自分なんか言葉に投げかけるのか、何故自分に構うのか。

ベートが自分を『弱者』だと思っているから、ここにいるのだ。

ベルはベートという狼人を幾分か理解していない所がある。彼の評判も、稼ぎも、性格もスタイルも、全てを理解していない。

しかし、今の彼の瞳は手に取るようにわかる。弱者を見下し、そし

て嘲笑う眼だ。それは自分が弱者だから、ベートがそういう目をして
いるから。

しかしベルは、そのベートの眼に——『憧れ』を、持った。

(——遠い)

ベルとベートの間は、とても遠い。螺旋階段のスタートラインにい
るベルは、遥か頂上にいるベートに追いつくなど、今は無理な話だ。
しかし、だからこそ、ベルは駆け上がらなければならない。ベート
という「強者」を越えるために、そして自分という「弱者」を進化さ
せるために。

だからベルは——ベートの眼に、『冀望』を持った。

その見下される眼。弱者を見下ろすその眼は、ベルを奮い立たせる
には充分だった。

そして同時に、ベルは望む。

ベートが——もつと、遥か頂上に行くように。

自分の英雄の道が、さらに素晴らしい道程になると信じて。

(なーんてこと思ってさあああああああああ!?)

全てを思い出して、ベルは頭を抱えた。

ベルは強者のベートに強い憧れを持った。彼が高みに行く度に、自
分もそれを追うかのようにさらなる高みに行けるかもという、全ては
ベルの強い憧憬によって産まれたものだった。

こんな事をベートに言ってみろ。絶対に「巫山戯んな」と一喝され
るに違いない。というか、彼を憧れてもいいのだろうか。彼は迷惑に
しないだろうか。その不安がベルを占めているのだ。

「……………でも、これって英雄に近づいたっていう、こと……………だ
よね?」

しかしこれも、強くなるために、ベートが望む強者に近づいたとい

うことだろう。そう割り切ってしまえばいいのだ。決してこれからベートに追求されるのが怖いとかそういうのは抱いていない。

「……強くなるって、決めただろ」

もう誰にも、見下されない。ベートにも、あんな眼をさせない。

ベートの琥珀の眼を思い出す。自分よりも、遥かに「弱者」を実感している強い瞳。彼も底辺から這い上がって、今の地位がある。

その『憧れ』を、ベルはこれからも背負っていく。

そしていつか……ベルが望む『冀望』に、届くであろう。

「……ふう。よしー」

用紙を丁寧折り、落とさないようにポケットに入れ、ベルは自分に喝を入れる。

これは、一種のスタートライン。

まだ彼らの冒険は、始まったばかりである。

「ベート君、すっごい嬉しそうだけど……もしかして、ベル君に憧れを持たれるの実は結構」

「その口縫い合わせてやろうか？」

※リメイクするかもしれないお知らせ※

えー、本編でなくて申し訳ございません。実は外伝8巻を読んで決めたことなのですが……。

一話、リメイクしても、いいですか？（涙目）

ベートきゅんの過去編がやっと明らかになって……本当に彼は凄い男でした。続々と明らかになってくるベートきゅんの過去編を読んで、私は「この過去編も背負って本編を書きたい」と思ったのです。どうやってL.V. 5まで登り詰めたのかという話もずっと考えていたんですが、このまま行くと何処か辻褄が合わないところが出てしまう。そんな時にこの外伝8巻——ベートきゅんメイン巻が出ました。

前のファミリアの存在も、何故彼がオラリオに来たのかという理由も明らかになったので。そして第一章も終わった所です。今ならリメイク——それか、この作品のリメイクも考えているところですよ。今のところリメイクするのは一話だけと考えていますが、もしかしたら大幅にリメイクするかもしれない。もしこの作品自体をリメイクする場合でも、この作品を消す気はありません。

勝手な事情で申し訳ありませんが、何故彼があんなにも皆を、弱者を罵るのかという理由が明らかになったので、その理由を棒に振ることはしたくないのです。

本編を読んで読んで、考えて考えて、やっと出た言葉が「リメイクするかしないか」という事。ブックマーク、評価をしてくれた方々には申し訳ありませんが、もし作品自体をリメイクする場合にはなったら、その時はそのリメイク作品を覗いてくれると私は発狂致します。

もしかしたら皆様の反応でこのまま続けるかも知れません。それ

しかも一日デートするとか何それ俺眺めてたい！アイシャさんちよつとそこ代わって!!ベートきゅんとお近づきするチャンスなよ！レナちゃんと一緒に迫って焦るベートきゅんが見せるかもしれないんだよ!?最高じゃん!!!

過去編は本当に読んで悲しくなった。特にヴィーザルファミリアにいた時のベートきゅんなんて凄く幸せそうで、愛も持っていて、仲間と馬鹿騒ぎして……もう何から何まで涙が込み上げてくる。何なの？彼は私を泣かせたいの？泣かせる魔法でもあるの？

漫画でもチラツと出てたベートきゅんが倒れ伏せるシーンってあそこだったんだね……そこからベートきゅんは始まってたんだね……。

レナちゃんが死んだって悟ったベートきゅんの顔が嫌でも想像できた。アイシャさんが殴らないのもわかるし、本編見た人ならわかるけどベートきゅんの心の声が涙を誘った。だから彼は強くなるようにしてたんだね。

リーネちゃんはまじで天使、イイネ？

後半はひたすらベートきゅんがかっこよかった。ベートきゅんが魔法を持っていったのも驚いた。ベートきゅんのメタルブーツって魔法の劣化版……所々に伏線があつたんだね……。

本当にベートきゅんの魔法はベートきゅんそのものだった。魔法は冒険者そのものだってこういうことなのね……。

所々フレーズインするアイズちゃんも良かった。最後のイラストのアイズの目も「あつ」て思わず声を出してしまった。ロキィ……お前もスゲエよ……神様ってやっぱすげえんだな。

そう思っていた時期も俺にはありました!!

なんだよあの終盤！ロキィ何やってんだよ！天然なアイズちゃんが間に受けちゃうだろ！でもグツジョブ!!良くやった!!

